

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	北海道大学	拠点番号	D01
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点 (Center for the Study of Cultural and Ecological Foundations of the Mind)		
研究分野及びキーワード	〈研究分野: 心理学〉(社会的認知・感情)(社会的相互作用)(集 団)(文 化)(生態研究)		
専攻等名	文学研究科人間システム科学専攻, 文学研究科歴史地域文化学専攻, 教育学研究科教育学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 山岸 俊男 教授 他 19名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成16年1月現在）を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について></p>	<p>心理学、社会心理学、認知科学、社会学、人類学、教育学、実験・行動経済学</p>
<p><本拠点の特色及びその目的等></p>	<p>本拠点の特色は、人間・社会科学統合に向けての国際的な流れを生み出す最先端の研究教育拠点の形成を目指している点にある。今日までの人間・社会諸科学においては、個別の知識が蓄積性を欠いたまま並列する状態にあったが、本拠点では、適応・進化・マイクロ=マクロ・ダイナミクスをキーワードに、認知科学や生物学の成果に基づいた社会科学の形成を目指す。この目的に向けて、本拠点は国際実験ネットワークの中心地として機能すると同時に、教員・ポスドク・大学院生からなる研究チームを軸にしたプロジェクト型の大学院教育を展開することで、研究成果を国際的に発信できる強力な若手人材の育成を行う。</p>
<p><COEを目指すユニーク性></p>	<p>本拠点の目標は、部分的には世界のいくつかの拠点と共通している。しかしそれらの拠点のほとんどは、実験経済学（チューリッヒ大学）、進化心理学（UCSB）、人間行動生態学（UCLA）、行動経済学（サンタフェ研究所）など特定の分野からのアプローチに集中しており、認知科学と社会科学の統合を念頭に置き、マイクロ=マクロ・ダイナミクスの観点を強調する拠点は、世界中でも本拠点のみである。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性></p>	<p>近年における実験・行動経済学の急速な発展に代表されるように、社会科学は現在、科学的な人間性理解を強く必要としている。本拠点における研究は社会科学が必要とする人間の心の社会性の解明をめざすものであり、社会科学の新たな発展のために極めて重要な役割を果たすことが期待されている。本拠点における教育は、認知科学と社会科学をつなぐ研究を将来にわたって担う人材の育成に大きな貢献を果たすことが期待される。</p>
<p><本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果></p>	<p>心の社会性の解明と、社会科学のための新たな人間像の構築という本拠点がめざす目標は、本拠点単独で5年間に達成可能な目標ではなく、世界の他の拠点と競争し、また協力し合いながら今後10年程度の時間をかけてはじめて達成可能な目標である。本プログラムは国際実験ネットワークの中心地として、この巨大な流れの方向に対して指針を与えうる研究成果を提供する。同時に他の国際拠点との間で研究協力が可能な若手人材を育成する。</p>
<p><背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等></p>	<p>現在、経済学をはじめとする社会科学の中から、社会科学の基礎となる人間行動の科学を形成しようとする動きが急速に強まっており、人間の「非合理的」行動を説明するための理論形成において、認知科学者、行動生態学者・進化生物学者の間の提携が進みつつある。またそこで生まれた理論を検証するための実験研究も社会科学者により開始されている。これらの動きは今後10年程度の間には社会科学に根本的な変革をもたらす、認知・生命科学につながる「真の」社会科学の形成に繋がるであろう。その社会的意味は、物質科学が20世紀の社会に与えたのと同じ程度のインパクトを、21世紀の社会にもたらすことになると考えられる。</p>

機 関 名	北海道大学	拠点番号	D O 1
拠点のプログラム名称	心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点		

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

これまで行われてきた拠点形成の実績は、研究の進行、成果の国際的情報発信を含め高く評価することができる。また、若手研究者の育成も順調であり、その成果は今後一層実を結ぶことが期待される。

しかしながら、心の社会性を解明し、社会科学のための新たな人間像を構築しようとするねらいのもと、学際的な研究組織で拠点形成を図ろうとはしているものの、実験社会心理学、特にゲーム理論的アプローチへの傾斜が強く、研究組織を構成する発達心理学や人類学など、他の事業推進担当者の関与が明確ではない。また、研究拠点の活動を裏付ける理論として「心の文化・生態学的基盤」という新しい視点が創出されてきているかどうかはまだ未知数である。当初の狙いであった人間・社会科学の統合という拠点形成の方向性を改めて具体的に示されたい。